

AZ

651

92



01028472

海の生命線

国立国会図書館



* 0056917000 *

0056917-000

AZ-651-92

海の生命線

海軍省海軍軍事普及部

1933

AJD

AZ
651
92

7/6

昭和八年六月

海の生命線

海軍省海軍軍事普及部

(以印刷代謄寫)

AZ
651
92

393.9



1028472

海の生命線

海軍大佐 武 富邦 茂

一、日本は太平洋の心臓部

太平洋には動脈に似てゐる暖き流れがあつて、それが一巡してゐる。赤道に近き海面では、貿易風の影響を受けて緩やかに西走する幅の広い流れがある所謂赤道海流であつて、それが「ヒリッピン」群島や大陸に衝突して、方向を北方に變へ、漸次北上して臺灣琉球の岸を洗ひ、黒潮の名を冠して土佐沖、遠州灘より鹿島灘に及び更に東方に方向を變じ二分して一はその儘東流し、一は「アリュウシヤン」群島を洗ひ北米沿岸に達し合流して南下所謂「カリフォルニア」海流となりて、赤道

附近に至り全く北半球の太平洋を一周して、赤道海流に歸投する。
斯様にして赤道附近で生れた暖き海流は、太平洋を一周し、亞細亞、亞米利加兩大陸と無數の島嶼を洗つてゐる。

この暖流の速さと幅とを考察するに、日本沿岸を通るとききの黒潮が速力最も速く、幅も一番狭い。土佐沖紀州灘邊にては一晝夜の速力實に六十哩に達する。その色は紺碧であつて、試みに手を入るれば、藍に染まんかと思はれる位である。

黒潮はどう見ても太平洋の大動脈だ。して見れば日本は心臓部だといはねばなるま
5。

或る歌人は「黒潮は東に流る朧夜の大わたつみは更けぬしづかに」と歌つた。黙々として東に流るゝ悠久三千年の間、この先盡未來際まで變ることなきこの紺碧の流、我が蜻蛉洲は之が爲に潤ひ、山川草木の美、人情の醇、氣候の和、一としてこの暖流の影響にあらざるはない。我日本と黒潮との因縁は、申すも畏きことながら天祖大神の結び給ふ處たるを思へば、黒潮を抱き太平洋に思ふ存分胸をはり手を伸ばしてゐる、

皇國の姿こそ我等の誇であり、この誇こそ伸び行く日本の原動力であらねばならぬ。

二、潮流と魚族

神代の昔は百人乗りの獨木舟が、黒潮に乗つて遙々この國土に渡來したであらう。

今は鮪と鰹と鰯が乗つて來る。我國の漁師は盛に之を漁獲する。東京の魚河岸は鮪が一日たりとも姿を見せねば蓋を開けぬ。江戸ツ子の味覺をそゝるものに鮪の油身と初鰹とがある。この美味は皆黒潮の齎すものだ。

三十五萬艘の我國漁船の大部分は黒潮とその影響する處で使用され百十萬の漁民は此處に生計を營んでゐる。

日本人は昔から肴と穀物を食ふて來た、海の幸、陸の幸二つながら天孫民族の具有する宿命的の幸福である。豊葦原の五穀と黒潮に乗る魚族を食べて民族の性情は順良溫雅に、頭腦は透徹緻密になつた。

黒潮を支配する我民族には本來鬭争性はない筈、海洋の有つ包容不捨の大作用をう

けて、我國には肇國のはじめより和御魂が尊ばれ、上下の心を支配して來たことを看過してはならぬ。近時流行の鬭争性は或は食料の西洋化に歸因するかも知れぬ。あながち外來思想の惡影響とのみは云へないかも知れぬ。

今日我國青少年の運動競技に於て、世界を斷然凌駕してゐるものに只一つ水泳がある。水泳の誇り、世界一の誇り之こそ海洋國民の有つ當然のものであらねばならぬ。野球の如き拳闘の如き模倣追従の域を到底脱する事の出來ぬものよりも、水泳の技を伸ばして行く處に新興日本の意氣がある。

斯くの如く我國の歴史に、至大の關係を持つ黒潮の起原地は、赤道海流でありその海流の洗ふ六百二十三の島々こそ、今日の南洋委任統治地域であることに想到すれば、この地域は宿命的に我國の領土であらねばならぬ感がする。

(イ) 南方大漁場

さて黒潮の魚族は果して何處から乗つて來るかといへば、恐らくその巢は南洋群島あたりであらう。

南洋委任統治の群島は、南赤道を境として、東西二千三百哩、南北千五百哩の廣大なる海面に、六百二十三の島嶼の集團がそれである。

悉く珊瑚礁であつて、上に青々亭々たる椰子林を載せたるものである。

此處に緩徐な赤道海流がある。そこが魚族の發生地であり、成育場である。

世界的南方漁場は正に此處を謂ふのである。

昨年度の漁獲高

鮪	一一萬キロ
鰹	一一八〇萬キロ
鰹節	八四萬キロ

鮪、鰹の罐詰は漁獲地に於て製造し、直ちに之を世界市場へ運搬する如くするを便とする。

日本海に獲れる大鰯は、今日現に工業用として成功してゐる。バター、ワゼリン及石鹼の原料として充分に役立つてゐるが、南洋の鰯はサーデンとして、歐米に輸出す

れば誠に好適ではあるまいか。

(口) 北方大漁場

日本の北を流るゝものに寒流がある。「ベーリング」海と「オホーツク」海より流入南下するもので、この附近に世界的北方の大漁場がある。

此處は鮭、鱒、蟹の産地である。

一昨年の漁獲高

北海道	三四、五〇〇、〇〇〇
露領沿海州	一一、四〇〇、〇〇〇
蟹工船	七、三〇三、〇〇〇
母船式	一一、六〇〇、〇〇〇
樺太	一一、〇〇〇、〇〇〇
合計	六八、八〇三、〇〇〇

近來蟹工船の發達著しく、陸上産額とは比較にならぬ程の優勢を示してゐる。

北海漁場の年産額は多い時は七千萬圓にも達してゐる。

蟹工船は公海に於て漁獲し、直ちに船内にて製造し、其儘「ロンドン」、「ニューヨーク」邊りへ輸出するから、隠れたる國益となる譯である。

將來南方北方兩漁場より毎年一億圓の産額を上げるとは至難ではあるまい。之も輸入超過を緩和し、國富増進従つて世界的信用を繋ぐ有力なる方法と見るとき、海洋國の恩恵を痛切に感ぜざるを得ないのである。

我等は徒らに天然資源の缺乏を恨んではならぬ。世界地圖は塗り變へられ、陸上の財寶は漁り盡されても、海洋のみは神代の儘に、その財寶を抱いた儘残されて居るのではないか。太平洋の富、それは到底計り知るべからざるものである。

三、北に濃霧帯南に強風帯

暖流と寒流、それに緯度と地球自轉等の色々複雑せる原因から、日本の北方——千島から「アリューシャン」群島にかけての海面は、有名な濃霧帯である。濃霧は海上

交通の船舶にも頗る厄介な代物だが、同様に航空機にも大敵である。亞細亞大陸と亞米利加大陸との空中進路は、北方「アリュウシヤン」群島傳ひに行ふを最も便利とするが、未だに定期航空路の開けざるは、一に濃霧の災する處であるから、一朝有事の際を考へる時には、此の方面の霧は國防上も役に立つものと申さねばならぬ。

尙南方を見れば、臺灣海峡は世界に有名な貿易風の強く吹く所で一年の内でも十一月から翌年三月迄は實に朦朧巨舶さへ困難する事が少くない程である。

尙又日本に襲來する颶風暴風の發生地は、矢張りこの強風地帯である。往昔元寇襲來の折神風として未曾有の國難を一掃したことは我國民の腦裡に活々と刻み付けられたる記録である。

之を要するに北方の濃霧帯といひ、南方の強風帯といひ、何れも今日の處定期航空路としては不適當であると共に、時に國防的障壁の一としての存在價值を之に認むる。

然し北方よりの空の脅威が、濃霧のために全然滅却するのではない。この航路は地理的には絶好のものであるが、氣象的に相當の障壁があるといふだけのこと、濃霧

を冒して自由に航空の出来る方法でも發見されたら、問題は解消されて立派な天下の大道たることに誰も異存はない。

四、道は中央にあり

北海に濃霧帯あり、西海に強風帯ありといふので、勢中央東海に比較的平穩帯がなければならぬ。その平穩帯こそ南方航空路が伸びる處である。即ち伊豆七島より小笠原群島、硫黄列島、「マリアナ」群島を経て「サイバン」、「バラオ」に通ずる路である。

この航空路は脚下に點在する諸島を眺め而も帝國の領土であるから、この位心強い事はあるまい。日本の本土を離れ太平洋の空に乗り出して、飛石のやうな島傳ひ而も日の丸の御旗の輝く上を飛びながら、赤道まで達することが出来るのも昭代の有難さで、時勢がさうさせる。

「サイバン」より東の方布哇方面に伸びる航路が出来よう。「バラオ」より南は一路赤道を越えて僅かに半日の空路で、「ニューギニア」の樂天地に渡り、更に南下しては

指呼の間に濠洲大陸に取り付くことが出来る。

「バラオ」より西方「ジャバ」を距て、「シンガポール」に出て印度洋に向ふ航空路も當然出来よう。

「バラオ」は南洋委任統治群島の最西南部にある港灣であつて、其處より「ニューギニア」迄汽船便に依れば、門司より大連に行くのと大體同距離である。

重ねて云ふが「バラオ」は日本の港、其處には日の丸の御旗が立つてゐる。その港から赤道を越えて「ニューギニア」迄僅かに空中路で半日航程。決して遠い處でもなければ、鬼の棲む處でもない、お隣りの國だ。沃野千里の常夏の樂土だ。

五、世界的經濟雄飛の原則

凡そ一國がその勢力範圍内に於て、容易に寒、温、熱三帶の豊富なる原料を収集することが出来れば、確かに世界的經濟雄飛の可能條件を具備してゐるものといへる。尙又右三帶より収集したる原料に、優良なる加工をなし優良なる製品として、世界市

場に持つて行く、而もその輸送の方法を海上に採る。即ち海運業の活躍に期待することが出来れば、一層の好條件である。

翻つて日本の地理的價値を見れば、實に天恵豊かで北は千島、樺太より西は臺灣に至る迄二千哩に亘り、南は小笠原群島より南洋群島に至る地域は寒、温、熱の三帶に跨がり、而も四面環海の海運國であるから、眞に世界的經濟雄飛の條件を具備した處といへる。北方寒冷の地に滿洲の大資源があり、中部温帶に朝鮮、日本内地及支那一體の資源を有ち、更に臺灣以南表南洋地方に熱帶の豊富なる資源を控へて居るが、何れも我が勢力範圍のものとする事が出来る。

日、滿、南の經濟ブロックは眞に緊要であつて、互に異りたる原料により異りたる生産をなし、共喰をやめて有無相通の原理による事であるから、眞の共存共榮も之に依つて期待することが出来る。

或る經濟學者は「熱帶を制するものは世界を制す」といつたが、高い温度に強烈な光線、毎日見舞ふ驟雨、肥沃な土壤は農産物にしても米二回、甘蔗三回といふ風であ

るから、投下資本の回収は實に速いものである。

移民にしても温帯より寒帯に向ふよりも、寧ろ熱帯に向ふ方が適當のやうである。況んや我が移民が出先に於て競争相手として勞銀廉き生活程度低き支那人を有するは、決して好條件ではない。

六、裏南洋の經濟的價值

南洋の地域を假に表南洋と裏南洋とに區分する。表南洋とは馬來半島、蘭領印度諸島（ジャワ、ボルネオ、スマトラ、セレベス、ニューギニア）及「フキリツピン」群島をいひ、裏南洋とは我委任統治の所謂南洋群島である。

裏南洋は赤道以北の太平洋に、東西二千三百哩南北千二百哩に亘り六百二十三の珊瑚島より成り總面積百四十方に過ぎない。主なる島は「バラオ」（二十四方里）「ヤツプ」（十四方里）「サイバン」（十二方里）であり住民も僅かに七萬人、内日本人二萬五千人である。裏南洋そのもの、經濟價值は大したものではない。裏南洋の眞の經

濟價值は表南洋へ、濠洲へ、更に進んで印度洋へ進出する爲の足場として存在する。

裏南洋の主要産物は椰子實より採るコブラ、それに砂糖、魚類と燐礦とである。近來耕地も拓け移住民も殖へ、従つて輸出が盛になつて關稅の收入が増加し、爲に南洋應は最初本國よりの國庫補助として毎年三百萬圓を仰いで居たが、近年收支相償ひ全く經濟が獨立の域に達したのである。

日本の殖民地として獨立經濟の出來てゐる處は、臺灣と南洋群島のみである。

七、表南洋の經濟的價值

(イ) 輸 出

表南洋の住民は主として馬來人、フキリツピン人、蘭領印度人であるが、總て一億を算する。その消費市場としての價值は相當大なるものである。我輸出品は主に綿布、人絹、雜貨であるが、最近二年間の輸出高を示せば次の通りである。

昭和六年度

一〇、九〇〇

萬圓

日支事變勃發當時に比して昨年は實に五千萬圓の増加を示した。之は主に表南洋に於て多年巢喰つて居た華僑なる一種の支那人仲介商を排して、我同胞が直接土民と取引を始め、一年にして完全に華僑をノック、アウトすることが出来た爲である。日支事變も南洋貿易發展の上から見れば、實に此上もなき好機となり役立つたものである。

斯くして中支、南支に於て失ひたる輸出貿易の減少は、確かに表南洋及びその以西に於て償ふて餘ある位であるから、左程悲觀するにも當るまい。況んや華僑を排して伸びゆく我對南貿易が、その信用を今の中に植ゑ付けて置くに於てをやである。日支事變鎮定後に於ては一層我對外貿易の發展を想はしめるものがある。

利益は一時、信用は永久であるから、今といふ今は世界戦争當時に於ける我貿易商の一部が將來の信用も顧みず、只々一途に儲け主義に墮した事に鑑み、斯様な事を再び繰り返す事のなきやう努むべきであると思ふ。

昭和六年七年の對南洋輸出貿易の趨勢より見れば、本年度は或は二億圓に上るのであるまいか。

(ロ) 輸 入

主として原料の輸入であるが、その中主なるものは馬來半島の「ジョホール」王國と「トレンガン」王國よりの鐵礦石であつて、日本内地需要額の四割を占めて居る。次に蘭領印度の石油を推さねばならぬ。従來は「ボルネオ」よりの産油を輸入してゐた我海軍も此處より多量の供給を得て居た。然し今後は此處に限らず「セルベス」「ニューギニア」地方よりも産出する可能性がある。鐵の原礦も亦此の附近に埋藏されてゐるから遠からず開發されるであらう。

南洋のゴムは有名なものである。麻も同様である。棉は未だ輸入しないが、將來棉の最良の産地として「ニューギニア」が尤も囑目されてゐる。

「ニューギニア」は「バラオ」より二日航程の處に横たはる世界的大島であつて、北海道、本土、九州、四國の總面積よりも尙廣い。住民は僅かに二十萬の半開の土

人である。一年の内に米は二回甘蔗は三四回とれ、特に棉花、珈琲に適する。

棉花は南洋興發會社が土人に試作させたものを、鐘紡に委嘱試験せしめた結果は、極めて良質で六十番手細糸に適することが證明された。

棉花は鐵、石油、羊毛同様我國の工業に缺くべからざる原料であつて、自給自足の建前より研究の結果朝鮮、滿洲よりも産出するやうになつたが、熱帶の品質とは全然違ふものである。

羊毛の世界的産地は濠洲、新西蘭である。濠洲大陸は「バラオ」より赤道を越ゆれば指呼の間に横はつてゐる。

朝鮮、滿洲には棉花同様羊毛も産出するが、地理が違へば矢張り品質が違ふ。

我國が籠城戦のための自給自足であれば、或は品質の悪い原料を以て満足すべきも、苟も平時國際競争戦に打勝つには、より良き原料を以て、より良き加工をなし、より良き製品として、世界の市場に持ち出さねばならぬ。この意味に於て我々は滿洲、朝鮮の原料に満足すべきでない。

八、南洋委任統治諸島の國防的價値

裏南洋は前述の通り、赤道以北の海面に、東西二千三百哩、南北千二百哩の廣さに亘り、六百二十三個の島々から成立してゐるもので、この廣き海面と島嶼とが日本の領有であつて、此處に帝國の嚴然たる實力の存在すると否とは、直ちに本國の運命に關することである。

この裏南洋と日本本國との關係を分り易く例へて見れば、裏南洋諸島を含む海面を一の大きな袋と想像する。この袋は約中央部より北上する「マリアナ」群島、硫黄列島、小笠原群島、更に富士火山脈の諸島に連りて、日本本國に接續する。

この東西二千三百哩の袋は、如何なる外壓に對しても萎縮したり變形したり乃至破裂してはならぬ。この袋の異狀は直ちに日本本國の異狀を意味するからである。故に之を膨らんだ儘の常態に保つ爲には相當の内壓を與へて置かねばならぬ。

然らばその内壓は如何にして與へるかといへば、「マリアナ」群島と富士火山脈の線

に依つて行ふのである。即ち本國より活力を吹き込んで置けばよい譯である。その活力は何であるかといへば、外でもない海軍力である。

この袋と管とに海軍力を充實さして置けば、決して潰れるやうなことはない。袋と管とが嚴然として所在する事に依つて、北太平洋は東西に兩斷される。その結果は少くとも西太平洋に於ては、帝國海軍の海上權力が十分に伸びて居ることを意味する。西太平洋に帝國海軍の海上權力が存在する事は、平戦兩時共交通貿易が支障なく行はれるといふことであり、列國が嚇かす經濟封鎖の如きも實際には行はれないといふ意味となるのであるから、日本は如何なる状態にても死命を制せられることはなく、參つたと申す必要はない。

又この袋の中から、我々日本海軍の目が光つてゐるといふことは、東太平洋にも無條件に、敵艦隊や飛行機兵力などが飛び込めないといふ事になる。

語を變へて言へば南洋群島が不幸敵に利用されたら、飛石傳ひに敵は我本土に近寄るであらう。その時は西太平洋から帝國海軍の威力が失はれるであらう、砦が陥り壕

が埋められて本城は到底持ち耐えることが出来まい。

茲に南洋群島の國防上の重大性があると見なければならぬ。

滿洲が北方陸正面に於ける國防第一線であるならば、南方海正面に於ては、南洋群島が國防第一線でなければならぬ。斯くの如く吾々海軍の目が遠く二千哩の外にも光つてゐる事は、海國日本の安全保障となり、それが即ち、滿洲問題の前後處置に至大の關係を持つことになる。日支問題の解決、滿洲國の生育、東洋平和の國策に對し大洋と大陸とは表と裏とであつて不可分のものである。

九、海防即空防

日本國土の防衛に關する國民の認識は充分でないやうに考へられる。我國は海國なるが故に敵の航空母艦などより何處からでも無條件に襲撃を受ける弱點を持つてゐるといふ考へ方が、一般に普及してゐるやうである。

然し我等は次のやうに考へる。陸を以て接讓する所謂陸國であれば、その國防第一

線は國境であらう。國境を越えて他國內に自國の國防線を延長する事は出来ない。之に反し我國の如き海國では敵の來襲に對しては國防線をいくらでも海上に張り出すことが出来る。又張り出すべきである。之が天意である。海上遙かに數百哩も數千哩も踏み出して、皇國を守るやうに、肇國の初めより國防方針は積極的に決定してゐると見るのが至當である。

吾々海軍々人は世人の考へてゐるやうに、左様に太平洋を無條件に開け放しにはしてゐない積りである。帝國海軍に飛行機があり多數の艦船がある以上は、海上よりして皇國日本の戸締りは相當に致して居る積りである。

試みに考へて見れば、我海軍に飛行機があり偵察機があり攻撃機、戦闘機がある。其等の有する行動半徑を以て沿岸數多の基地より前方遙かの海面を搜索偵察してゐることは無論のことである。

飛行艇ならば約八百哩、偵察機なら約三百哩位の行動半徑を以て晝夜前方を捜してゐることは、國防常識あるものには容易に考へ付くべき事である。

尙その外線には多數の艦艇が游弋して、各々その有する行動半徑を以て警戒してゐることも、容易く想像されねばならぬ。假りに二千哩線上に我精銳なる巡洋艦ありとせば、その附近には矢張り艦載飛行機が飛んで居る。

以上の通り常識的に考ふれば日本國土は二千哩の圏内に於て、幾段にも防備が施されてゐる。それは警備の目であり塹壕であり移動要塞である。

國土防衛は國土の上に於て防ぐにあらずして、海上遙かに於て、より早く發見し、より早く撃滅せねばならぬ。即ち敵を國土に寄せ付けてはならぬのが、海國々防の本義である。

この本義を没却して局地防禦を以て足れりとする思想が、國民の間に扶植されたとせば、それは百年の禍根となる。

日本の都市のやうに海岸に接近せる所にあつては空襲に對し一層局地防禦の價値は少い。價値の少いものを持つことなく、進んで之を捜し索め一舉にして、その禍根を絶つことを考へるのが本筋ではあるまいか。

敵が北方より來らば、滿洲より朝鮮より或は日本より飛び出して先手を打つべきである。敵東方南方より來らば、沿岸各基地より海上遙かに飛び出し、同時に艦船が移動要塞となりて先手を打つことが肝要であらう。相手は「レコード、ホルダー」の爆撃機にあらずして敵の艦隊であり航空母艦であることを附け加へて置く。

物には自ら本末がある。海國國土の防衛は進んで撃つのが第一義で、退いて守るのは第二義である。

然し戦勢は變化を伴ふ。對勢の變化に應じてどんな奇襲部隊が飛び出して來ないとも限らぬ。又俗に上手の手から水が漏るといふこともあるので、左様な場合に都市の局地防禦は極めて必要である。都市防空の如きは困難中の困難事であるから、平素から充分に訓練して置かねばならぬ、徹底的に教へる必要がある。之には官民一致の大努力を要する。

然しながら第一義と第二義は明かに存在することを承知して置くべきである。

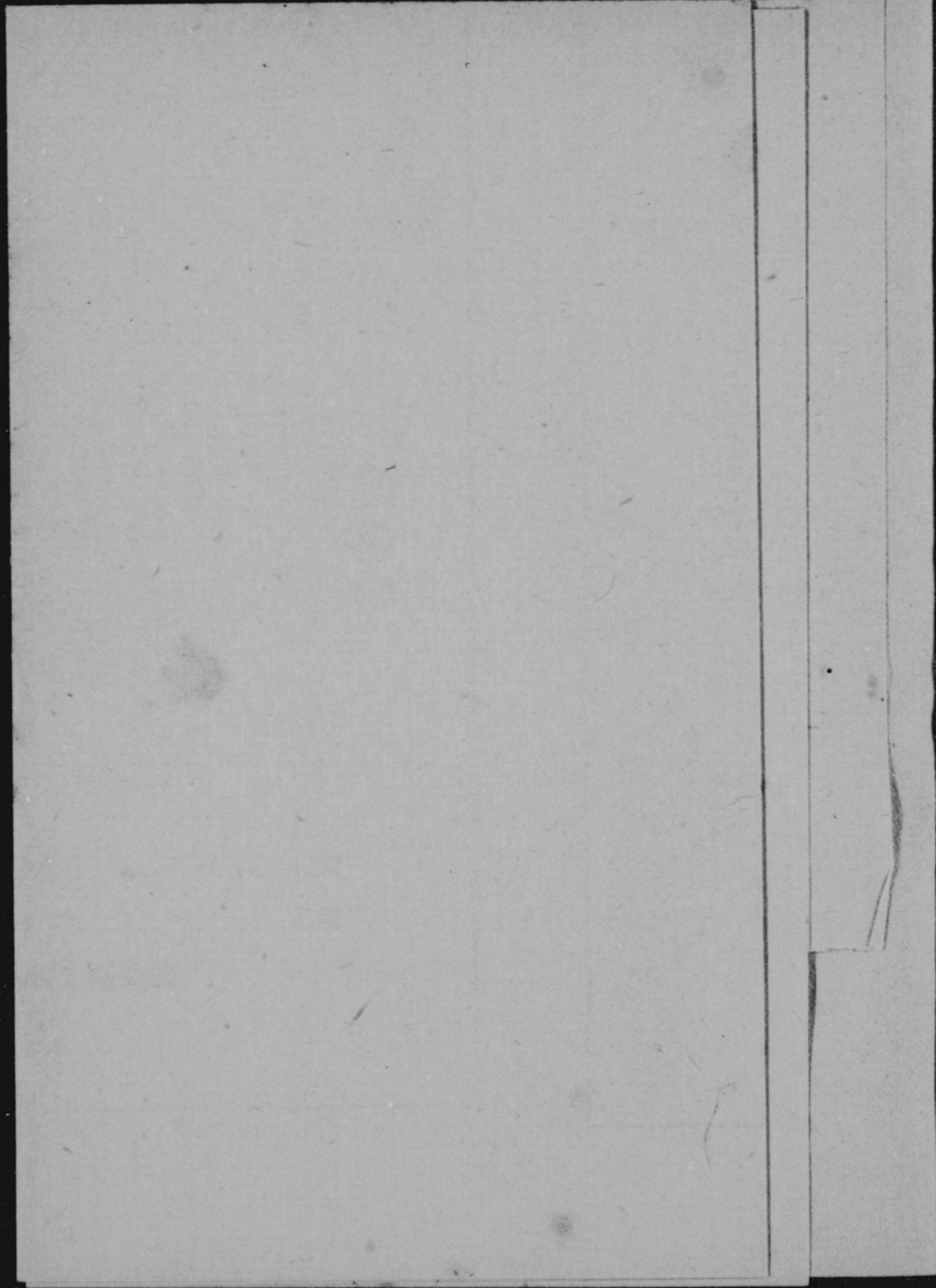
海防即空防の理は此處にある。さて我海軍の任務を地理的に見ても容易の業でない

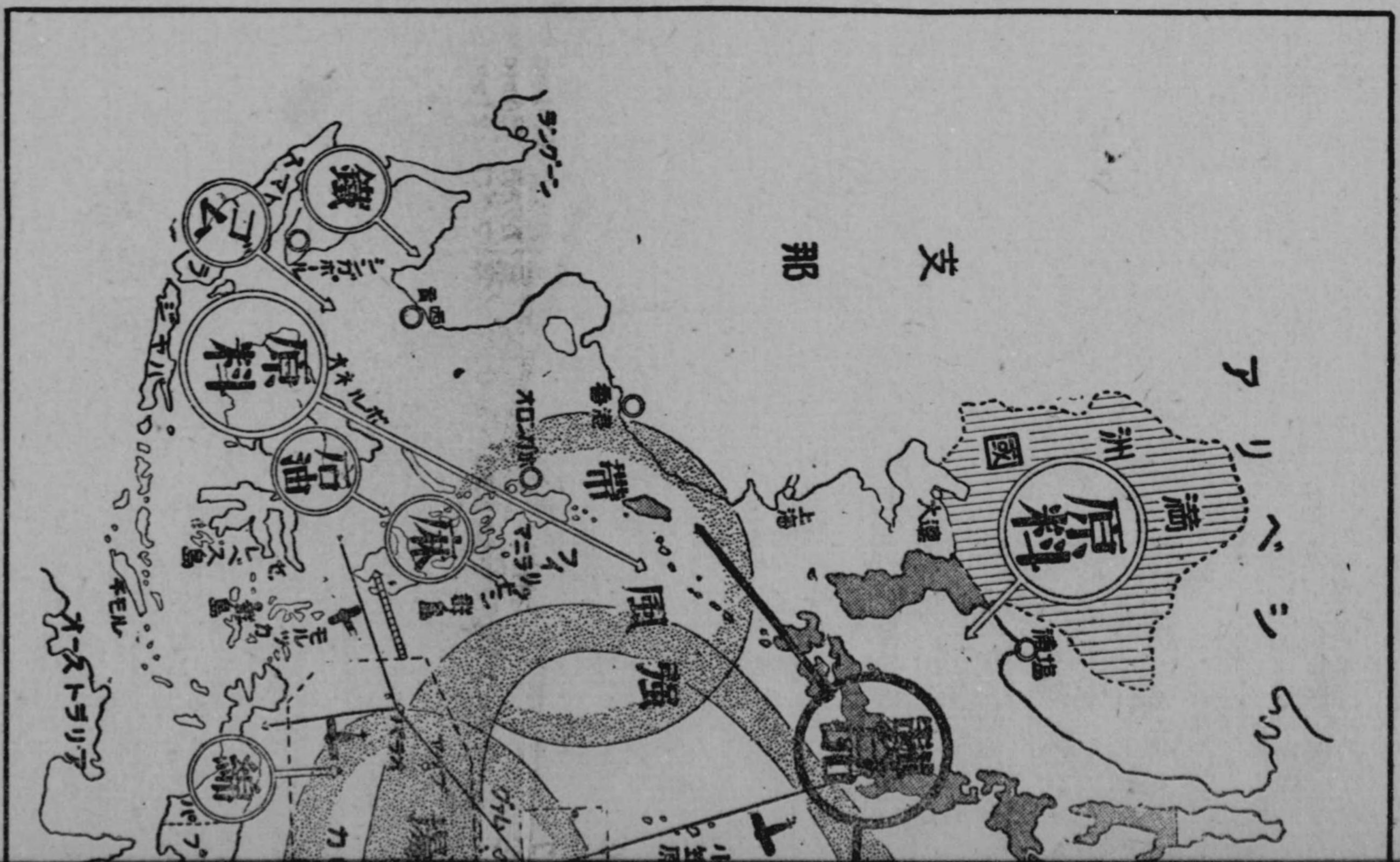
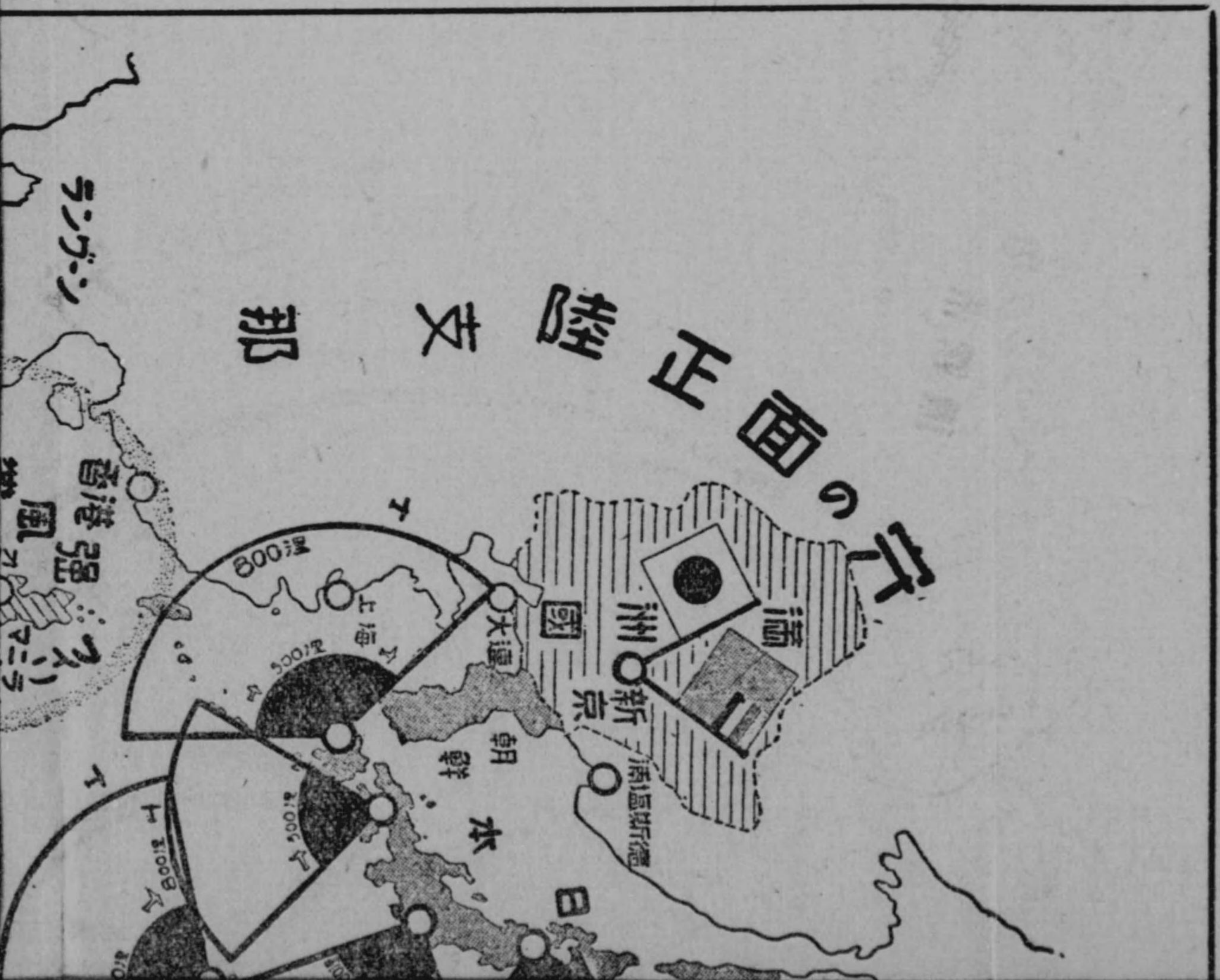
事が分る。第一、物と人とが要る。相當量保有せねば眞に海防も容易でない。國民は條約上の兵力量を見られたい。尙又條約制限外の飛行機に非常に力瘤を入れて居る外國のあることも忘れてはならぬ。飛行機に對するには飛行機を以てするのが原則である以上、我にも萬一の場合に太平洋の制空權を敵に渡さないだけの用意が絶対に必要である。

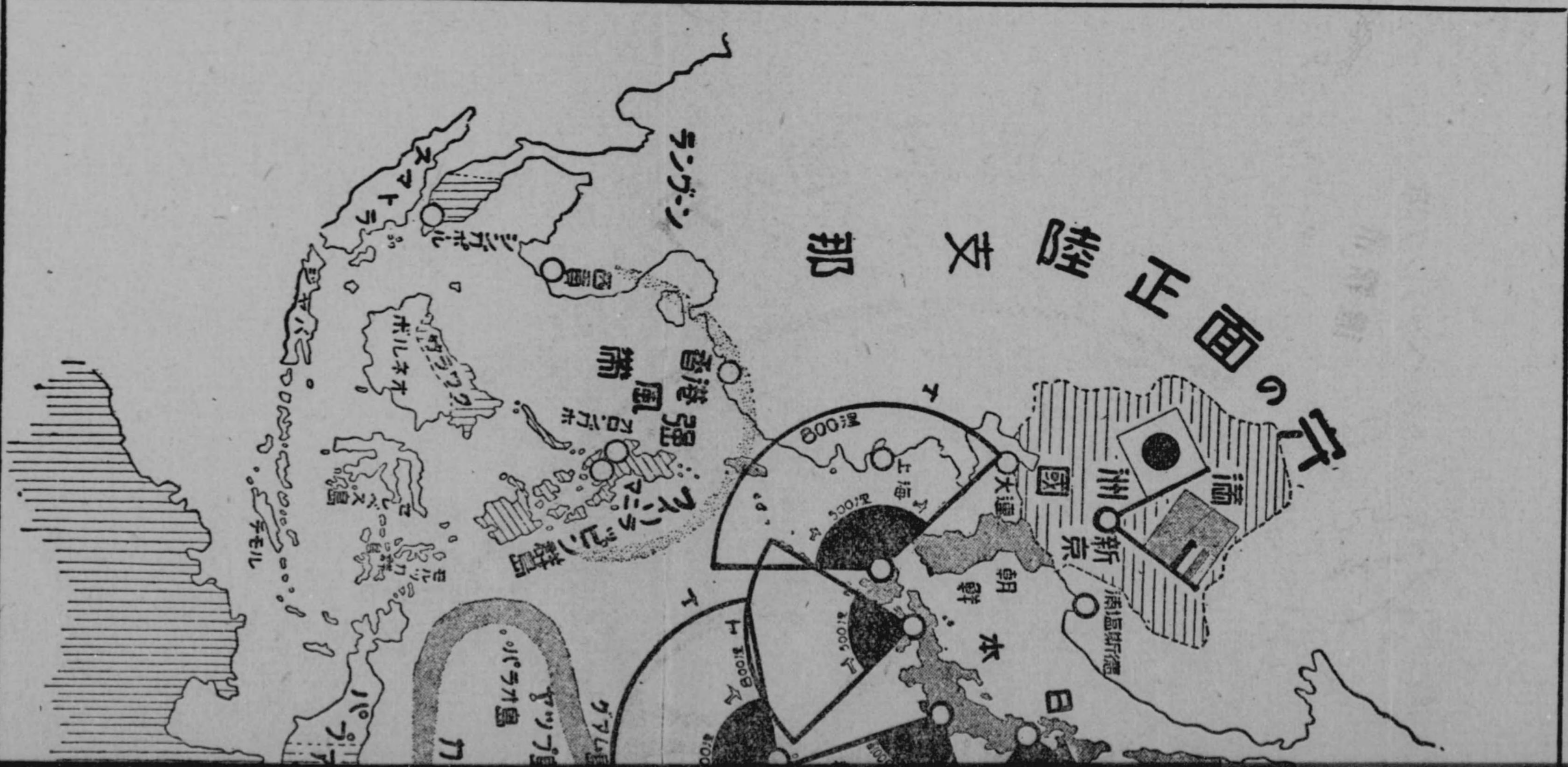
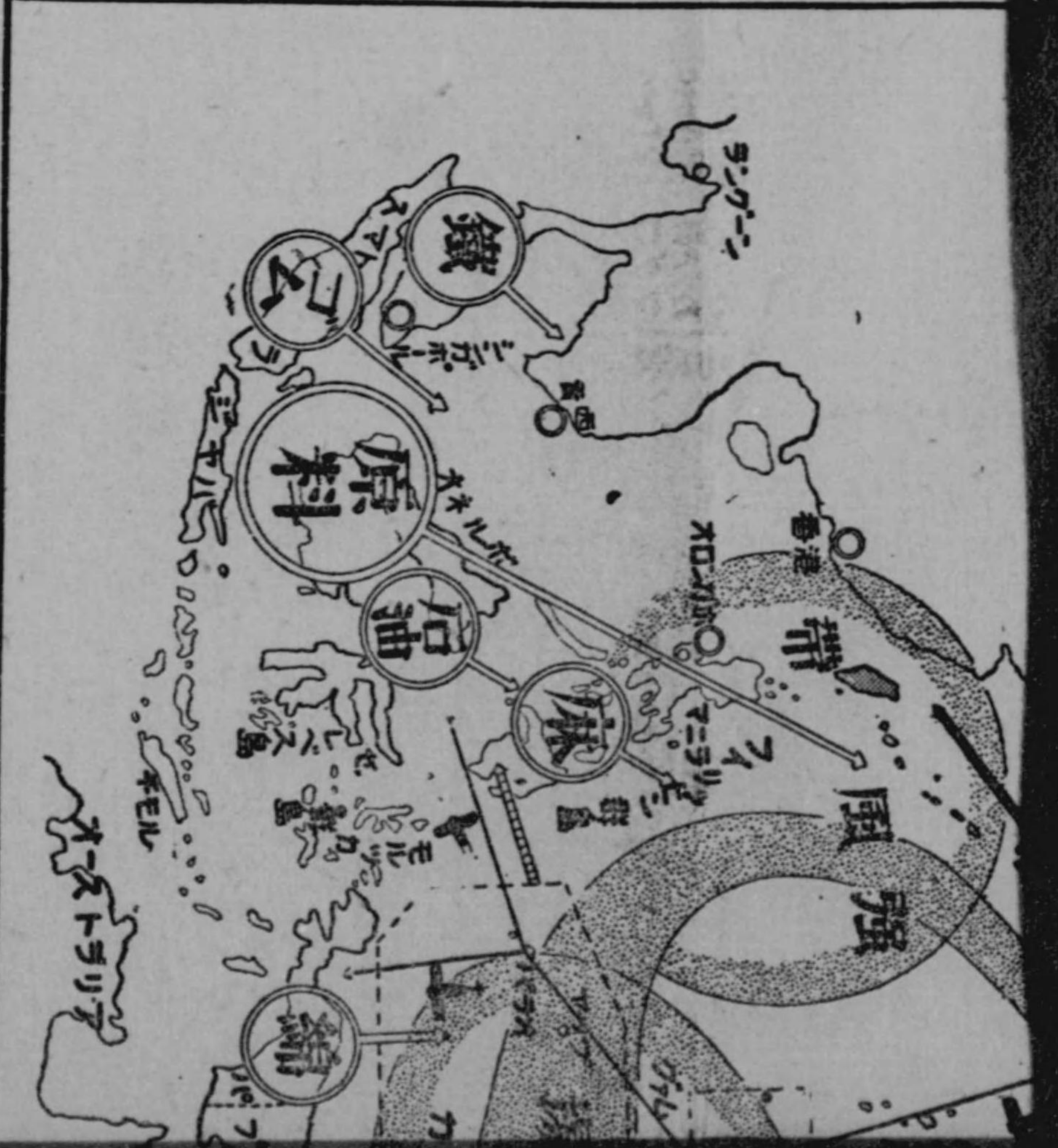
制空權を敵に委したら、如何に有力な艦隊があつても最後の勝利は覺束ない。

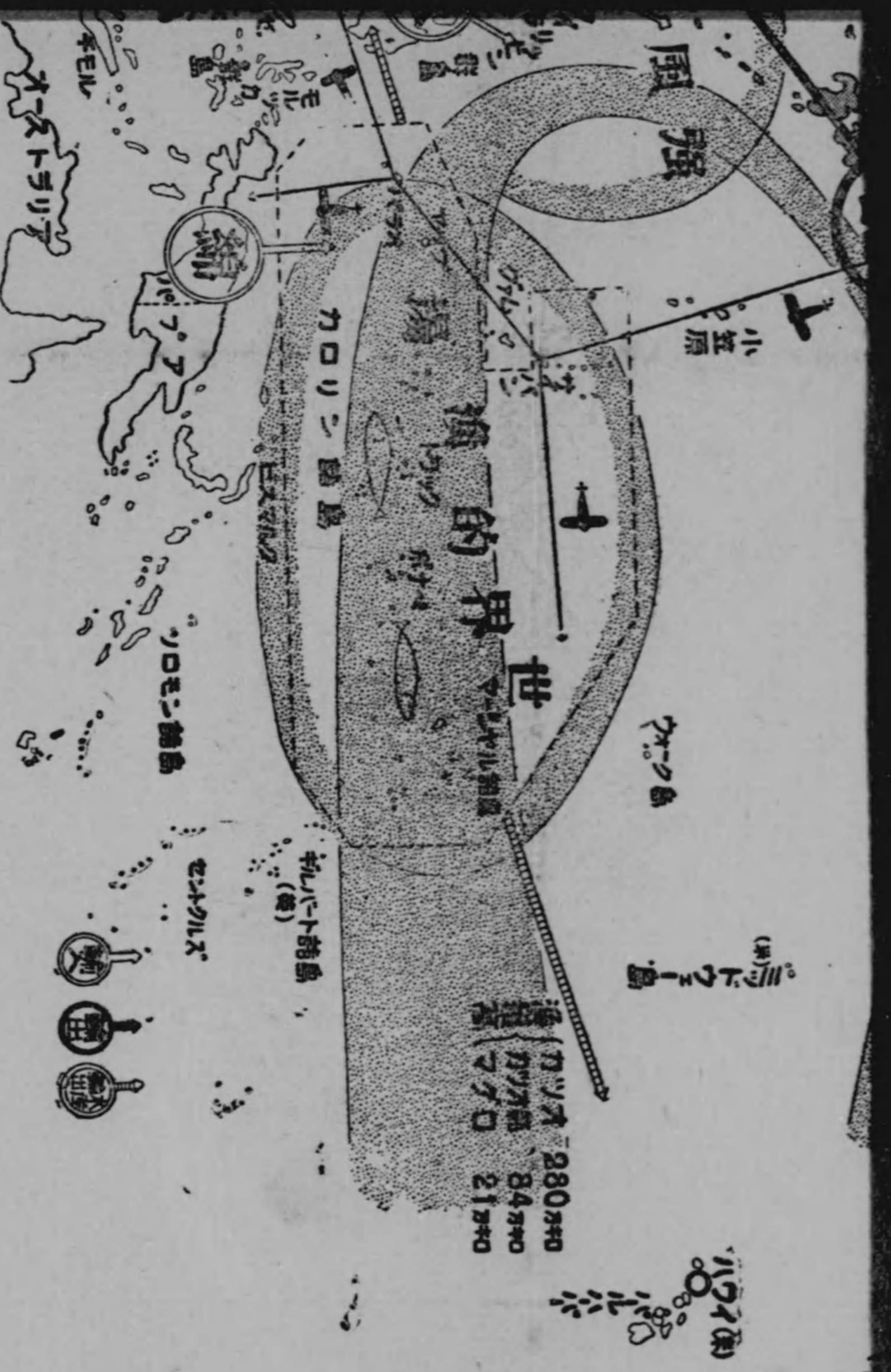
海上の決戦「此一戦」に海國日本の運命が托されてゐることには昔も今も將來も變りはない。

(終)

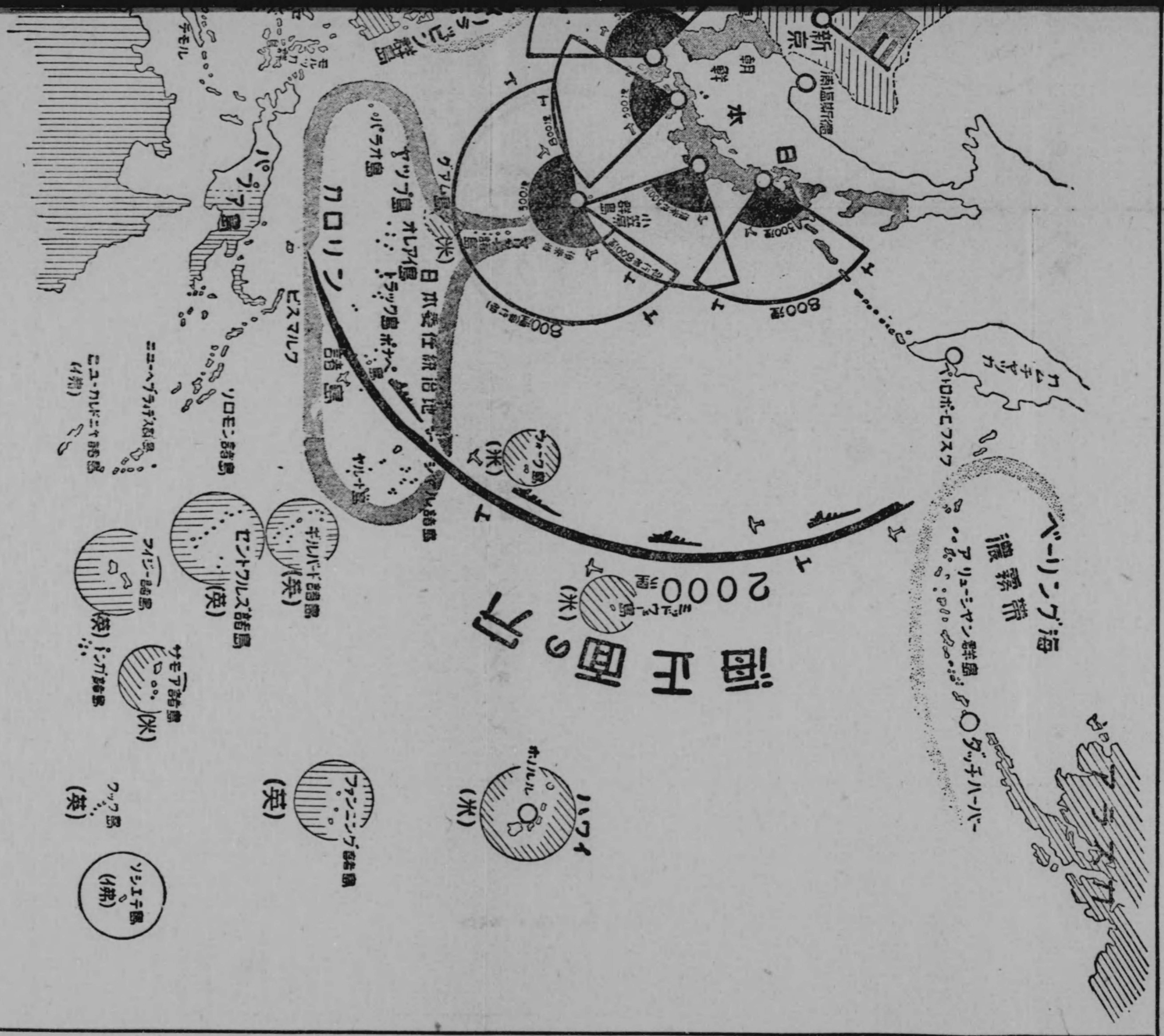


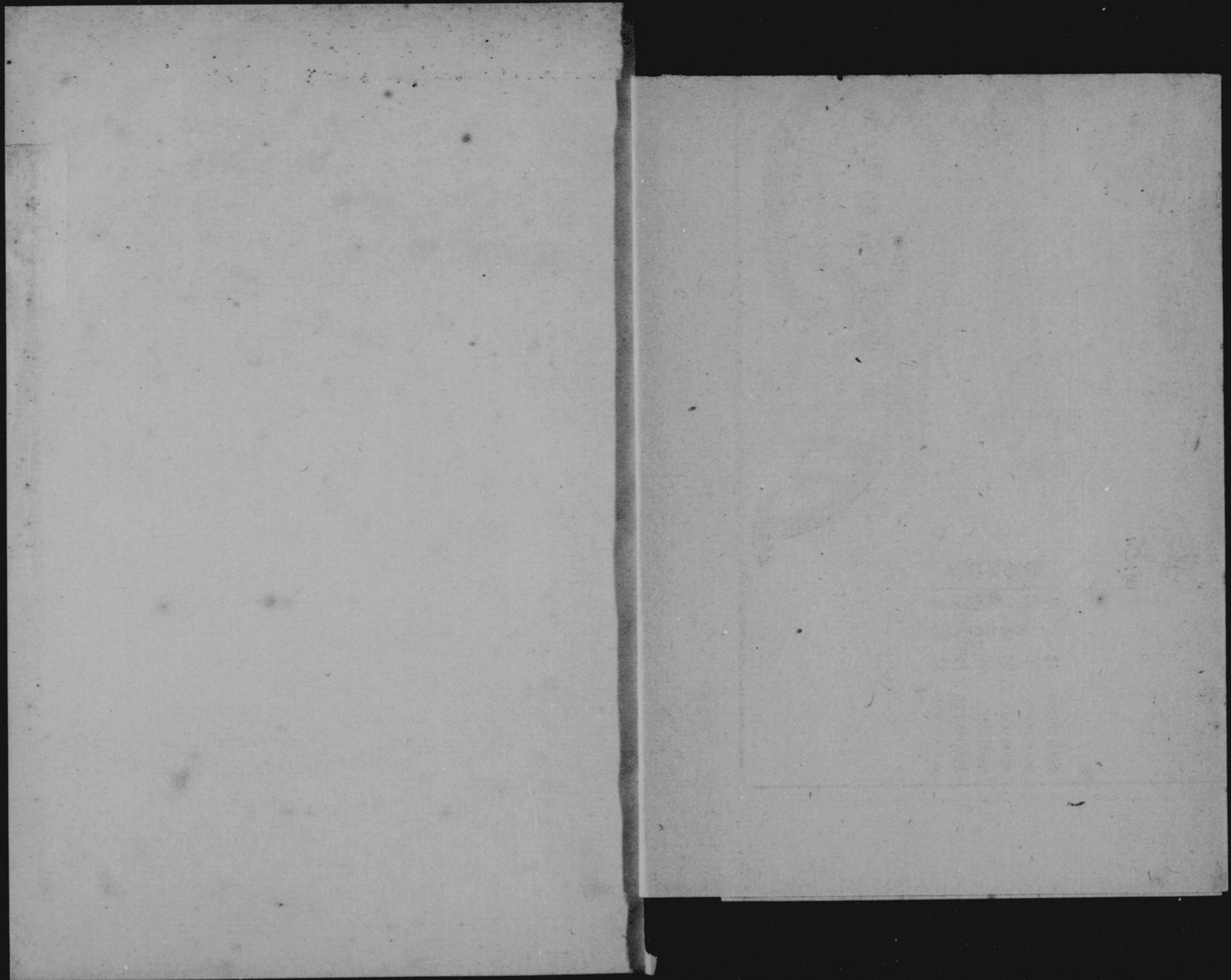


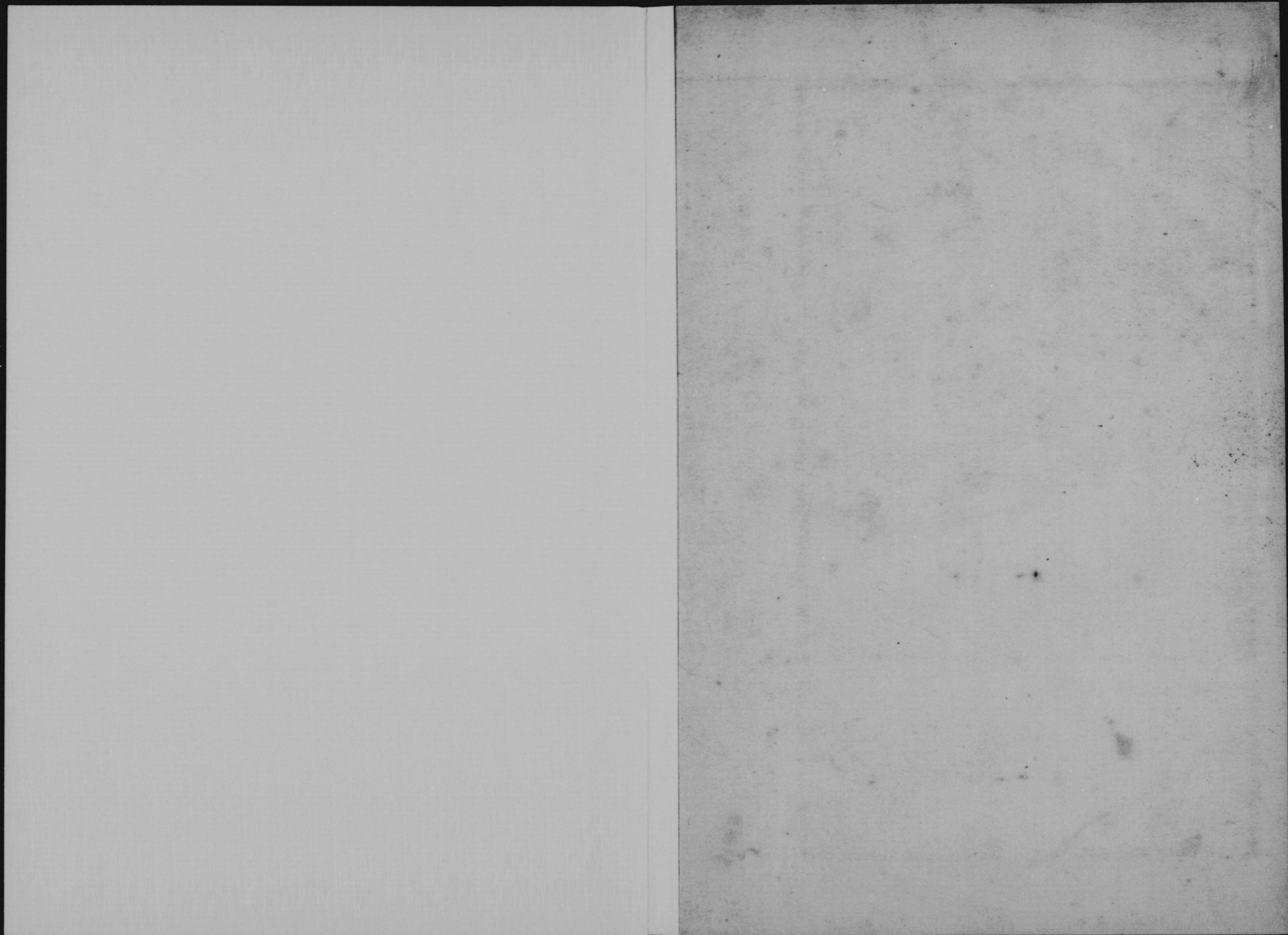




表南洋へ輸出額
昭和六年 一〇、九〇〇、〇〇〇圓
昭和七年 一五、九〇〇、〇〇〇圓







100